

明珠

龍泉院
参禅会会報

△聖僧文殊大士像開眼特集▽

従容録に学ぶ(一一)

第一〇則 台山婆子

〔示衆〕
衆に示して云く、収あり放あり、干木、身に随う。能殺能活、権衡手にあり。塵勞魔外、尽く指呼に付す。大地山河、皆な戯具となる。しばらく道え、これ甚麼の境界ぞ。

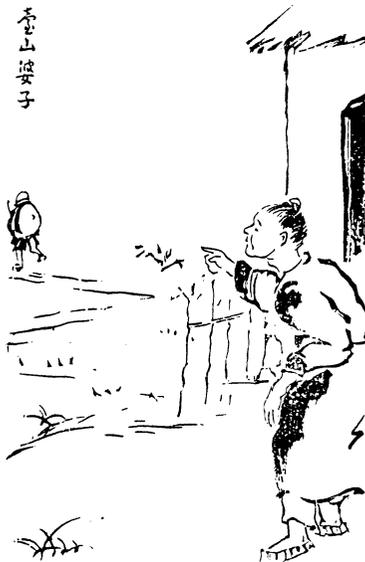
〔本則〕
挙す、台山路上に一婆子あり、(傍城庄家、道を夾む兔。)およそ僧あつて、台山の路いずれの処に向つて去くやと問えば、(一生行脚して、去く処もまた知らず。)婆云く、驀直去と。(未だ好心に当らず。)僧、纒かに行く。(賊に著くもまた知らず。)婆云く、好箇の阿師、また恁麼に去く。(你早や侯白。)僧、趙州に挙似す。(人、平かにして語らず。)州云く、待て、ために勘過せ

んと。(水、平かにして流れず。)州、また前の如くに問う。(陷虎の機。)来日に至つて上堂して云く、我れ汝がために婆子を勘破せり。(我れ更に侯黒。)

台山は、中国の四大仏山の一つである五台山のことで、文殊菩薩の靈場として有名です。ちなみに、他の三靈場は、観音の補陀山、地蔵の九華山、普賢の峨眉山です。

五台山は山西省の北地にあり、四世紀ごろから文殊菩薩の所在する靈地とされ、北魏には寺が建ち、しだいに盛えて三〇〇もの寺があつた時もあります。禅宗の人びとは、唐代から五台山との関係が密接になり、日本からの渡来僧も、みな参拝を憧れた聖地です。

今回の「台山婆子」の公案は、唐代きつての名僧、趙州和尚の並はずれた禅の力量を示すものです。趙州については、すでに第一八則「趙州狗子」で紹介しましたが、若いころは常に五台山を訪れていた経歴があります。



台山婆子

まず、万松の「示衆」です。収支取捨はお手のうち、殺活自在の働きができ、どんな煩惱にも惑わされず、天地世界はみな心のまま、こういう人はいったい誰だろうか、といったほどの意味です。いうまでもなく、これは趙州のすばらしさをほめたたえているのです。

つぎに、宏智の「本則」です。五台山へ登る路に、一人の婆さんが住んでいた。文殊を礼しに行く雲水が「五台山へはどう行くのかね」と聞くと、婆さんはいつも「まっすぐ行きなさんせ。」雲水がツツと行きかけると、婆さん「おやこのオッサンも同じぢやわい。」これがある雲水が趙州に告げると、趙州「ヨシ、わしが婆さんの本性を見届けてやろう。」こうして五台山に向いて婆さんと同じことを聞いた。後に趙州が雲水たちに言うには、「わしゃあ婆さんの腹のドン底まで見抜いたワイ。」

「本則」は枝葉を取っていますから、私たちは、趙州が老婆に同じことを聞いたならば、他の雲水の時と同じような言動がなされた、という筋書きを補って読まなければなりません。

ともかく、この公案を表面的にだけみると、何ら他愛のない話しのようです。禅問答というものは、

文字づらはそんなものです。ところが実は、その中に深い道理があるのですね。そこがむつかしい。でも、その深い意味をつかむのが公案の眼目であります。

まず、この老婆は茶店でも出していたのでしょうか、一筋縄の婆さんではありません。万松は「傍城の庄家」、つまり五台山のほとりで待ち伏せしている虎だ、といっています。「兎」はこの場合は虎のことです。そして、道を聞く雲水に対する「まっすぐ行け」、これが曲者です。道にかこつけて心のあり方を言っているからです。だから、それでスタスタ行く者に対して「このオッサンも同じだ」と、何ら主体性を確立してない雲水はまだ修行が足りないぞ、と批判しているのです。万松はそんな婆さんを「侯白」、つまり閩の国の有名な盗賊にたとえています。どえらい老婆ですね。

だいたい、禅の公案には老婆がたくさん登場し、それが不思議と重要な役割りを担っているのです。たとえば、徳山に「三世心不可得」で立ち往生をさせた餅売り婆さん、三〇年間もっぱら煩惱を断つことを修行と心得違いをしていた雲水をたたき出し、庵までも焼き払った「婆子焼庵」の老婆など。

さて、もとに戻り、老婆のうわさを聞いた趙州さん、みずから五台山にやって来て、同じように道をたずねた。万松はこれを「陷虎の機」、虎をおとしめるはたらき、とコメントしています。趙州は老婆の同じことばに、五台山へは登らずにまっすぐ帰り、雲水達に「わしは婆さんの正体を見破ったぞ」といった。つまり、婆さんの言った通りのまっすぐ帰るといふひとすじの心を実践したのです。万松のコメントは「侯黒」、これは侯白にまさる大泥棒のことで、趙州のみごたさを讃嘆しているのです。おもしろいですね。



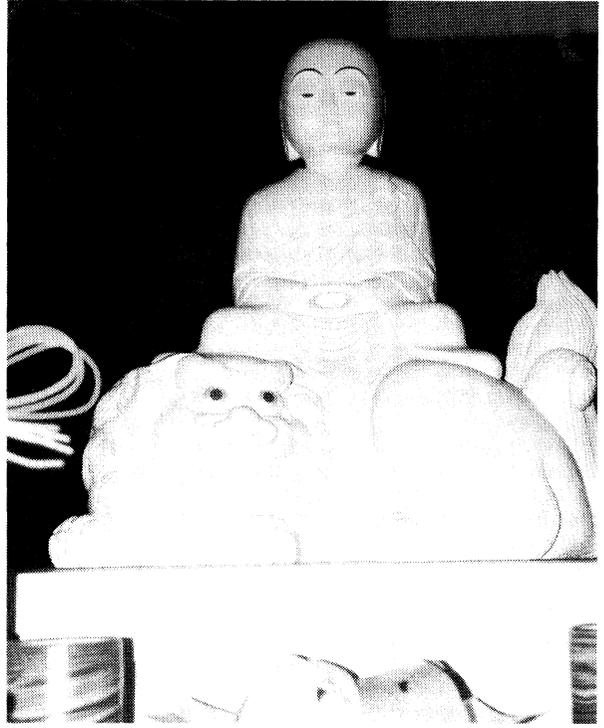
五台山の菩薩頂と塔院寺

禅の世界では、趙州のように二念にわたらぬ、ひたむきの実践が重んじられます。坐禅でも作務でも食事でも、そのときはそれだけに打ちこみ、余念をさしはさんではなりません。「なりきり」のころ、「ひたむき」の世界です。

趙州は、生涯こうした修行弁道に徹した古仏でした。二八歳のころ師匠の南泉普願に参じ、南泉から「仏道は知るとか知らないとかの領域ではない。知るとは迷いであり、知らないとは無意識のことだ」と、仏法は実践であるという深い道理を教えられ、悟りをえました。その後、なんと三〇年間も南泉のもとで修行弁道しています。

こうした、ひたむきの努力精進の姿勢は、年老けて観音院に住してからも変わらず、世に「北に趙州南に雪峰」と、唐末を代表する大禅匠と称されました。わたくしたちは、老いてもなおお台山の老婆を勘破に出かけ、みごとにまっすぐな道を実践して門弟たちに範を示す、すさまじいまでの趙州の気魄に打たれます。

なりきりは執着の反対です。生活の中で、嬉しい時も悲しい時も、とらわれなくそれになりきれれば、わたくしたちはどんなにかすがすがしく生きられることでしょう。



開眼された文殊さま

仏像を造る心

仏師 萩原 清光

まずはじめに、文殊大士像を造らせていただきましたことを、参禅会の皆様、椎名老師、そして、見えざる仏様方のご加護に、心から感謝申し上げます。この度、編集子より表題のテーマにて一文をとのご要請をいただき、私も思う所がございましたので、拙文ながら寄稿させていただきます。私

は仏像を造りはじめてから二〇年近くになりますが、生来の怠け者の上に気まぐれが災いしてか、いまだに三〇体を越えることができません。ただその一体一体には、それぞれに他に代え難い思い出がこもっております。古来より造仏の名人の境地として「木の中に仏様が見える。余分なものを削り落

してお迎えるのである。」といわれています。私も関根西雲師よりそのように教わりました。そしてもう一人、高橋信次先生より魂のことを教わりました。ある時、「萩原さんの造る仏様は皆かわいらしいけど、鳴子のこけしとどう違うのかな」と問われたことがありました。その時、「そうだ、祈り心なんだ。一刀三拜。込められた祈り心が違うんだ。」そう胸にストーンと落ちました。「万物皆仏性有り、だれもが幼い頃があった。偽りを知らず、傷つけることを知らず、仏様のように無垢だった子供の頃が、私がこの世を去った後も、この、像に出会うすべての人々がその時のことを思い出してほしい。だから仏像なんだ。」これが私の祈りでした。そうしてひたすらに、この仏像を待たれている人々の事を思う時、何か自分ではない者力によって造らされていることをはつきりと感ずるのでした。自分で言うのも変ですが、どのような仏様が生まれて下さるか、自分でも楽しみなものです。この度の文殊大士像も、形骸化著しい仏教界にあって、ひたむきに真理を求められる参禅会皆様の姿に、実にさわやかで若々しい力を感じられたものが現れたような気がします。

それと、何よりも忘れ難い事として、この像が出来上る少し前に、胎内に納めさせていただいた発願文を書いて下さいました齊藤谿泉先生と、道具造りから教え育てて下さいました関根西雲お師匠様が、相い次いでこの世を去られました。あの世から多大なお力添えをいただいたことと思われてなりません。すべてはみ仏の手の掌の上で、次はどのような出会いによってどんな仏様が生まれてくるのでしょうか。最後に、このご縁をいただきました龍泉院参禅会の皆様から感謝申し上げます。ありがとうございました。

合掌

萩原清光先生の略歴

一九五〇年一〇月 東京浅草に生まれる。

一九七〇年 高村光雲門下の関根西雲師より仏像彫刻を学ぶ。

一九七五年 東京芸術大学彫刻科卒業。

一九七九年七月 浅草公会堂にて初個展。

一九九〇年一二月 天徳山龍泉院文殊大士製作。

山梨県北巨摩郡高根町村山西割 二一三三三に在住



聖僧開眼・第八回成道会参加者一同（H2.12.9）

聖僧文殊大士像開眼

―第八回成道会の円成―

第八回目となりました成道会は
 一二月というのに暖かな小春日和
 の、平成二年一二月九日(日)午前
 九時から龍泉院で行なわれました。
 今回の成道会には、聖僧文殊大
 士開眼供養も併せて行なわれるこ
 とになりました。「文殊大士」さ
 まの造立には、椎名老師よりなみ
 なみならぬお計らいをいただき、
 参禅会員一同の発願から、一昨年
 正月から、毎月淨財積立てを行い、
 佛師萩原清光先生の手により無事
 円成されました。なお台座につ
 ましては、備州松づくりの台座が
 小畑美津子様よりご寄進をいた
 だきました。

当日は、椎名老師と隋喜僧二名
 の方々のご指導により、当山参禅
 会員三七名の方々が参加されまし
 た。はじめに、聖僧文殊大士開眼
 供養が導師龍泉院住職椎名宏雄老
 師によりとり行なわれました。白
 布に包まれました「文殊大士」さ
 まが除幕によりその童相を現わさ
 れたとき、参禅会発足二〇年の想
 いがそこに結晶されているのを観
 ました。

「佛は語らず、されどそこにす
 べてを語る」の感一杯で息をのむ
 思いでございました。

つづいて坐禅、法要、法話、記
 念撮影、昼食、茶話会の順で行な
 われました。ご老師のご法話も、
 「文殊菩薩」さまの生いたち、そ
 の生涯、終生、説かれた佛の智恵
 について話され、佛法は、我々の
 目や耳の感覚機関で求めとらえて
 もだめで、ただ行ずることにより
 本物が見えてくるものである。一
 人一人が道心を持って、佛道を行
 じていただきたいと語られました。

毎年このことながら裏方さんを務
 められました幹事さんに心より感
 謝申し上げます。

参加者

僧職 二名

会員 男子三四名、女子三名

合計三九名



聖僧文殊大士点眼香語

天徳山主

稽首五台山上人 威光凜凜現童真

智眼一開展般若 天徳山中禅風新

恭惟 本月本日 成道会之令辰 当山参禅会會員一同

結集浄心捨積浄財 新造立大聖文殊大士尊像 因弘前市

小畑美津子殿寄進台座一基 茲嚴修開眼儀 諷誦般若心

經 所集殊勲 令法久住 正覚円成 伏惟慈悲容納

門風従是宣揚去 普為人天転法輪

稽首す五台山上の人、威光凜々として童真を現す。智眼一

開して般若を展ぶれば、天徳山中、禅風新たなり。

恭しく惟れば、本月本日、成道会の令辰、当山参禅会々

員一同、浄心を結集し浄財を捨積し、新たに大聖文殊大

士の尊像を造立し、因みに弘前市小畑美津子殿、台座一

基を寄進し、茲に開眼の儀を厳修し、般若心経を諷誦す。

集むる所の殊勲は、令法久住、正覚円成ならんことを。

伏して惟れば、慈悲容納。

門風是れより宣揚し去り、普ねく人天の為に法輪を転ず。

平成二年十二月九日

聖僧文殊大士開眼供養

導師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

一、導師入堂 一同合掌

一、除幕・点眼

一、普同三拜 導師と共に一同三拜

一、献茶湯 お茶と蜜湯、並びにお菓子を捧げる

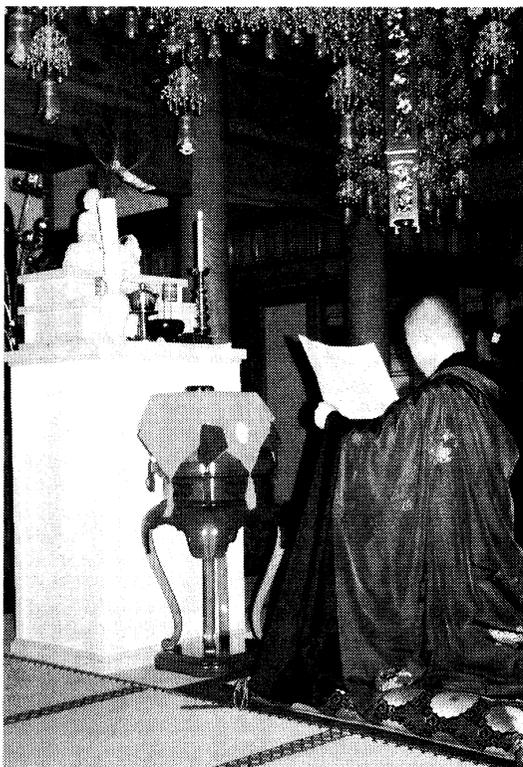
一、陳白文 開眼供養の主旨を導師が述べる

一、読経 般若心経、一同唱和

一、回向

一、普同三拜 導師と共に一同三拜

一、導師出堂 一同合掌



開眼供養の陳白文奉読

造佛の思い

松戸市 小畑節朗

昭和六三年の秋、龍泉老師よりそろそろ当寺でも「聖僧文殊様」のお像を新添しようと思う、龍泉院の予算の中からも充分可能。という有難いお話であった。

昭和四六年、参禅会開設以来の古参である高間利介翁に相談したところ、あと二年で、参禅会発足二〇周年になることでもあり成人にもなる訳であるから、我々で「聖僧様」を寄進しようではないか。という発案で、同年二月、聖僧新添幹事として、八木下真司氏と加藤健之氏をお願いして、この事業の推進に当たっていただくことにいたしました。

造像にあたっては、第一に道場守護と修行の無事円成を祈念する佛様をお造りするのであるから、この主旨を確り判っていたら、佛師にお願いしたい。又第二には、この参禅会に縁あって一時でも坐を共にした方々の、一人一人の思いを形に表わすものにしたらいと、考えました。

佛師には、龍泉院の門碑を揮毫された齊藤谿泉先生のご紹介により新々気鋭の佛師、萩原清光先生

に依頼することとし、製作期間を二年といたしました。

又、会員の皆様には、毎月定例坐禅の時、尊像完成予定図前に浄財をご寄進いただくこととして、浄財喜捨の精神を重んじて、個々のご寄進額は記録せず、その都度幹事より総額のみを報告していただきました。

尊像完成予定図は、萩原先生にこの像の完成予定図を書いていただいたもので、高間翁のご好意でこれを写真に撮って、参禅者に差し上げました。自宅の「聖僧」さ



成道会にて

まとして頂ければ幸だ、ということでした。単身赴任先で、壁に掛けられて坐禅に励まれた方もあると聞いております。お像完成後、会員の武田博志氏がご自身で立派にこれを表装されて、龍泉院什物として寄進されました。浄財寄進は平成元年一月より始めました。平成元年三月、聖僧文殊大士像新添の発願文を齊藤谿泉先生に揮毫していただき、末尾に協賛者全員に自署していただきました。

発願文は完成した文殊さまの胎内に納めました。ご都合で自署していただけなかつた方々の芳名は、幹事が代筆で記しました。先に申しました、形が心を進める勝縁になればと念じたからであります。

さて、幾百年も道場守護をして頂くお像を乗せるのですから、乗せる台座もそれに相応しいものと考え、浅草寿町の指物師、三浦玉舟氏に依頼いたしました。名人と言われる三浦さんは備前松の立派な台座を作って下さいました。斯くして二月二日、お像は山梨の工房より龍泉院に運ばれて、一月九日の開眼供養を迎えた次第であります。

思えば、龍泉院参禅会は、会則としては、入会自由、退会自由、月一回の坐禅と老師の提唱を聴く、

それだけです。その二〇周年を期してこの浄業を成し遂げたことは、聖僧新添幹事、年番幹事さんのご努力と共に、会員の皆様の思い入れの深さではないでしょうか。つきつめてどのような思いであるかは、自分自身でもわからないままに、悉有佛性がなさしめるはたらき、佛作佛行だと思わずにはおられません。

無題

船橋市 森岡 俊雄

私はなぜ龍泉院の参禅に伺うのか、書いて見たいと思います。お経をよくする方もあり、写経をなさる方もあります。皆それぞれ結構と存じます。私は道元禅師が言われる、「家業をしっかりやれ、どこへ出しても恥ずかしくない仕事をやれ」と仰せられます。この一点に絞ります。之が出来れば、拙工の一生は解決出来た事になります。なぜ坐禅を習うか、明鏡止水の気持ちになりたいのです。之が出来れば、銘刀はどうすれば打てるか、いくらかでも解ります。以上の事を一生懸命やって見ます。坐禅の明鏡止水の気持ちは出来そうにありません。

お化け話にさそわれて

松戸市 根岸 宣子

私が仏道に御縁を頂いたのは、もう二八年も昔の事になりますが、その当時は、全く、何も気が付きませんでした。

それは、結婚後の御挨拶に伺った夫の上司の夫人との出会いでした。小柄で美人で魅力的なこの夫人は、かつて新婚の頃、御主人から仏教の話聞き、「それなら、見せて下さい。」と手を出したとの事です。仏様は、見事に見せて下さったようです。夫人は数々の不思議な体験をなされ、私が出会ったこの時には、御夫妻揃って法華経を保持する在家の仏教徒だったのです。その後、お付き合いが続



自然はいつも心の師
(龍泉院竹林)

くうちに、時々その体験談を話して下さるようになり、私も「鶴田夫人のお化け話」を楽しみに訪問するようになっていました。今にして思えば、この話の中に仏教への導きが含まれていたのでしょうか。しかしながら、私はそのまま仏道を歩む素直さを持ち合わせてはいませんでした。「今の仏教は所詮葬式仏教じゃないか、キリスト教や新興宗教は日頃から人の悩みを聞いて、救いの手を差し延べているのに。」とつぶやいていました。が、彼女は諭すでもなく、「信も謗も共に仏道を成す。」とおっしゃいました。

三〇代後半に入ってヨーガに出合い、体調の悪さをこれで調べようとしていたうちに、今も師事している野村布慈子先生のお蔭で、ヨーガがもっと、もっと奥の深い修行の道である事を知りました。そしてその入り口に、ヤマ・ニヤマ(禁戒・勸戒)なるものがあり、調身・調息・調心、のヨーガの三拍子を揃えても、ヤマ・ニヤマ抜きではだめだ、と言う事もわかり、又これは仏教の戒を保つと同じ事ではないか、と思いました。共にインドに生まれたヨーガと仏教の教えが、その他の部分でも重なりあって見えました。「幾つもある戒を保つ事はとても出来ないから、取敢えず実行できそうなものを一つだけでも保ち、追って徐々にふやしてゆけば良からう」と何ともいい加減な心掛けで、最初の不殺生、これは私は殺人などしないからパス、次の不盗、これもドロボーしないからパス、次の嘘をつくな、「あ、これにしよう。」嘘も方便。人の為、等々の逃げ道を断つ為にも良い、と決めました。前の二つの戒を、深い意味も考えず、不必要とした浅薄さ、誠に赤面の至りです。

その後の事です。人との約束を自分勝手な思いから反故にしたい、

でも嘘はつかぬと決めてあるし、と逡巡していた時、母が急病になり、反故にせざるを得ない状況になってしまいました。私の思いは、好みもしてない条件付きで叶えられたのです。又その逆に、種々の条件が動いてくれて、都合よくなり、省みて見ると、エゴで願っていない時のみのようです。まさに「思し召し」とも言うべき不思議な働きがあるのではないかと気が付きました。ありがたいと言っか、恐ろしいと言っか、「これではいい加減な生き方はできない。間違いないの指針がほしい。」とつくづく思いました。

一昨年の暮に、坐禅入門の本を介して知った龍泉院では、坐禅の他に、何時かは読んでみたい、と一〇年来思っていた正法眼蔵の講義が行なわれているとは……こちらが望み、一歩進めば、仏はその何倍もこちらに近付いて下さるとか、私も、いつしか鶴田夫妻と同じ仏道を歩んでいた事に気が付きました。

参禅会に三回参加して、後八ヶ月も続けて休んだにもかかわらず、温かく迎えて下さった御老師はじめ先達の皆様方、宜しくお願ひ致します。

合掌

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
 経行鐘 二声 経行
 放禅鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く
 講師 龍泉院住職椎名宏雄老師
 平成二年一二月より「菩提薩埵四摂法」の巻を提唱中
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
 正午解散
- 一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
- 月例参禅会その他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月八日）
 釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（ ）内は座談の司会者

平成二年

一〇月二八日 二三名
 （今泉房子）

一月二五日 二四名
 （宮内 守）

第八回成道会 一二月九日
 聖僧文殊大士像開眼供養厳修

幹事 三町 勲
 同 添田昌弘

写真 藤原 公
 二月二三日 二一名
 （杉浦上太郎）

平成三年 二五名
 一月二七日 （高野千代子）

平成三年度新年会 於 芳野屋
 二月一七日 二五名
 年番幹事 杉浦上太郎
 同 今泉章利
 二月二四日 二三名
 （安本小太郎）

三月二四日 二四名
 （五十嵐嗣郎）

▼聖僧文殊さまの尊像が第八回成道会を期して開眼され盛大な法要が営まれました。先にご紹介したように、二年の歳月を要して

立派に完成いたしました。これも皆様の道心相続の賜と深く感謝するとともに、また喜びを共にするものです。

▼成道会には龍泉院老師より『修證義』と服部松齊先生の『修証義とともに』正統二冊を、平沢満代さんより「香袋」を今年も全員に賜りました。又会員の皆様よりお祝いをいただきました。厚くお礼申し上げます。

▼平成三年度の年番幹事は、杉浦上太郎氏と今泉章利氏をお願いした。平成二年度幹事、三町勲氏添田昌弘氏には一年間、一泊参禅、成道会等に多大のご盡力をいただいた。厚くお礼を申し上げますと共に、本年度両幹事さんに宜しくご高配をお願いする次第です。

▼湾岸戦争が終って、この戦争のもつ意味が冷静に問われる時期になった。イスラム教国イラクに対する、キリスト教国アメリカの不信感と、いらだちによる「宗教戦争」ではなかったか、と木村尚三郎氏が語っている。「頭で分っても心では分らない部分が大いからである」と。アメリカは又非キリスト教国日本に対しても同様の不信感をもっているのではないかと。無宗教であることを平然と公言する考えを改める時ではある。（節光記）